

カロリング期農村における「混合経済」

ES研4月例会報告要旨

丹下 栄

近年の西欧中世初期農村史においては、自営農民への関心の高まり（いわゆる「自有地モデル」に拠る諸業績）と呼応して、領主制の下にある、あるいは農業経営規模のきわめて小さい農民がそれでもいくらかの「自立性」を発揮していたことが歴史家の視界に入ってきたと言える。この報告は、個々の農民が行う経済活動の多様性が彼らの自立性をいくらかでも担保していたという見通しのもと、農民が営む手工業の実態と存在意義を探ろうとしたものである。

所領明細帳は保有農民の負担規定を通じて、大所領内部の保有農民が農耕以外にもさまざまな業務にたずさわっていたことを伝えている。例えばプレミアム修道院領ヴィランス（アルデンヌ所在）に居住する保有農民の活動は、穀作の他、牧畜（羊、豚）、紡糸・織布、漁撈、穀物の運搬など多岐に亘っていた。またここでは鉱山師fossariusという呼称を持つ領民、あるいは鉄製の鍋を納める負担のみを負う者など、専門的技能者とおぼしき領民も小地片を保有していた。つまり、農村居住者の大多数は（専門的技能者を含め）、農耕と手工業等の非農耕的活動の双方にたずさわっていたと思われる。

農民が行う手工業として最もひろく行われていたのは、繊維関連のそれであった。所領明細帳には農民負担として紡糸・織布賦役、糸や織物の納付が頻出し、また部族法典には亜麻窃盗に対する罰則規定が見られるなど、文字史料に繊維関連の文言が現れるのは決して稀ではない。さらに中世考古学の成果は、農民家計の枠内で行われた繊維関連手工業の痕跡をいくつか明らかにしている。例えばパリ北郊所在のカロリング期村落の発掘調査では、農民住居に隣接した機織場の遺構や麻の繊維を梳る鉄製用具が見つかった。また同地から出土した獣骨の分析によると、羊・山羊の飼育数は豚とほぼ同数であり、しかもその半数近くは2～6歳に達するまで、すなわち食用ではなく羊毛採取・搾乳のために養育されていたという。このように、中世初期において農民家族の多くは繊維関連の生産活動に、単に賦役労働力としてだけでなく、主体的生産者としても関与していたと考えられる。

その意味を考えるにあたってまず注目すべきは、繊維関連の負担はまづもって女性に課されていること、そして負担量は社会的地位、保有地の大小との相関が比較的小さいこと、この2点であろう。第1の点は、中世初期において農民家計が女性（妻）労働によって担われる繊維工業を不可欠の要素として内包していたこと、すなわち農耕以外のさまざまな生計手段、そして成年男子以外の労働力も家計維持に不可欠であったことを示す。そして第2の点は、生計維持手段としての繊維関連手工業の地位は、経営規模が小さいほど重要性を増してくること、言いかえると経営規模の小さな者、社会的地位の低い者がより切実に手工業に関与する傾向にあることを示唆している。すなわち農民家計は農耕と手工業とをいわば車の両輪として維持されていたと思われるのである。

ところで、小規模農業と手工業が同一の生産者によって担われる状況は、分業が未発達な「遅れた」状態として、従来ともすれば否定的なニュアンスで語られてきた。けれども農工兼営状態が工業化開始以前の伝統社会において日常的に見いだされることも明らかで

ある。その理由としては、少なくとも以下の2点が指摘されよう。第1に、例えば鉄工業のように、専業経営を可能にするほどの需要は見込めぬとき、鉄工業にたずさわる者は別の生計基盤、すなわち食料調達手段を必要とする。その手段とは、まずもって農業であろう。つまり手工業は農民の副業として営まれることによって初めて維持可能となり、広範にしかも持続的に存在するものの、しかし総量としては必ずしも大きくない需要に応えることができたと思われる。

第2に、生計維持に必要な食糧を自前で生産できない零細農民にとって、生計の維持にはしかるべき手段で得た補助収入によって食糧の不足分を購入することが不可欠であった。しかるべき手段としてまずとられたのが自身が製造した手工業製品の売却である。ちなみにW. ブライバーは、カロリング期パリ周辺における在地市場の簇生とサン・ジェルマン所領明細帳に毛織物納付規定（織布賦役ではなく）が多く見られることとを関連づけ、小農民家族の生計維持には原料の購入と製品の販売という2つの局面で、在地市場の存在が決定的な役割を果たしていたと想定している。しかし彼女の論は、在地市場と小農民との関わりを分業の進展過程（農工分離へと至るみちすじ）に位置づけることをめざしており、農工一体の状況をそれ自体として捉える視点は希薄と言わねばならない。われわれに求められているのは、ブライバーが必ずしも論の中心には置かなかつた、農工兼営と在地市場が零細農民の生計手段として不可欠であったという指摘をさらに展開させることであろう。この点でわれわれに重要な示唆を与えるのが、現在日本史の分野で練りあげられつつある生業論の視点である。ここでは「諸稼ぎ」という概念によって農民が生計維持のために行う多様な活動（市場交易への参画を重要な要素とする）に積極的な意味を与えることで、稲作中心主義、社会分業論への批判を深化させている。こうした視点から、伝統社会においては社会機能の維持に不可欠な経済部門の、少なくとも一部は、小規模・零細農民に担われることで初めて維持可能となり、そのことはまた、手工業を担う小農民の社会的地位にいくらかなりとも反映される（多方面からの需要に応えることによる所領横断的性格の獲得）という見通しが浮かびあがってくる。そのメカニズムを具体的に跡づけることを通じて、中世農民経済のあり方にさらに切りこんでいくことが今後の課題である。

史料

Hägermann, D. [1993] *Das Polyptychon von Saint-Germain-des-Prés. Studienausgabe*, Köln, Weimar, Wien.

Schwab, I. [1983] *Das Prümer Urbar (Rheinische Urbar, 5. Band)*, Düsseldorf.

研究文献

Bleiber, W. [1969] "Grundherrschaft, Handwerk und Markt im Gebiet von Paris in der Mitte des 9. Jahrhunderts", Otto, K.-H. / Herrmann, J. (ed.), *Siedlung, Burg und Stadt. Studien zu ihren Anfängen*, Berlin, pp.140-152.

国立歴史民族博物館（編）[2008]『生業から見る日本史—新しい歴史学の射程』吉川弘文館.